

後期デューイの自然主義的形而上学と教育理論

Later Dewey's Naturalistic Metaphysics and Educational Theory

柳 沼 良 太
YAGINUMA Ryota

はじめに

デューイはまずW. ジェイムズから強い影響を受けてプラグマティズムに方向を転じたが、その後、さらにC. S. パースから影響を受けることで自らのプラグマティズムを論理的に精緻化してジェイムズから距離をとるに至った。しかし、やがて、デューイはパース流の論理的プラグマティズムの限界に行き当たり、再びジェイムズのプラグマティズムやその独特の経験論を評価することになる。こうした経緯によって後期デューイは自らのプラグマティズムに自然主義的形而上学の次元を展開していくことになった。それと同時並行で、デューイは自然主義的形而上学に基づく教育理論を構築していったことはあまり知られていない。

先行研究では一般に、後期デューイの教育理論にみられる特徴は、教育界にも大きな影響を及ぼした世界恐慌との関連で生じたものと考えられてきたが、実際には、後期デューイが到達した自然主義的形而上学に由来するところが大きいと考えられる。筆者は先に拙著『プラグマティズムと教育—デューイからローティへ—』(2002年、八千代出版)の第2章3節2項においてデューイの自然主義的形而上学を特徴づけ、その時期の宗教論や芸術論との関連性を指摘したが、教育理論との関連性を十分考察することはできなかった。そこで、本稿では、最新のデューイ研究も踏まえた上で、改めて後期デューイの自然主義的形而上学に基づく教育理論の特徴について検討を深めることにしたい。

1 デューイの自然主義的形而上学の思想的背景

デューイの自然主義的形而上学の思想的背景としては、ジェイムズのプラグマティズム、アリストテレス哲学、そして新ヘーゲル主義の再評価が挙げられる。そこで、まず後期デューイがジェイムズのプラグマティズムやその経験主義を再評価し、改めてジェイムズを好意的に捉えるようになったことから取り上げていきたい。フォイアー (L.S. Feuer) が指摘するように、後期デューイの思想は、「ジェイムズの偉大さを再認識」した点に大きな特徴がみられるからである⁽¹⁾。後期デューイが再認識したこのジェイムズの偉大さとは、端的にいえば、知性と感情の区別、あるいは科学と宗教の境界を曖昧にしていく反二元論的立場をジェイムズが徹底させたということにほかならない。デューイによれば、ジェイムズは知性と感情の区別、あるいは科学と宗教の境界がもはや意味をなさなくなってしまうような何か深い感覚といったものを人間の経験の根源において見出していたのである⁽²⁾。こうした点からデューイは、ひとたびは批判的に捉えていたジェイムズのプラグマティズムや経験主義を再評価し、自らのプラグマティズムに自然主義的形而上学の次元を展開するための手がかりをジェイムズのうちに求めることになったのであった。

後期デューイが自然主義的形而上学へと方向を転ずることになった契機としては、このようにジェイムズを再評価したことが決定的に重要であるが、それに加えてさらにアリストテレス哲学と新ヘーゲル主義を後期デューイが見直すようになったことも考慮に入れなければならない。後期デューイは哲学の問題に関してコロンビア大学の同僚であるウッドブリッジ (F.J.E. Woodbridge) に少なからず啓発され、その影響によってアリストテレス哲学をデューイなりのやり方で採り入れることにより、自然主義と形而上学を融合する観点を見出していったという経緯がある⁽³⁾。実際、デューイは『経験

と自然』において自らの自然主義的形而上学の目的を「存在の一般的特徴の認識」と規定した上で、この目的規定をアリストテレスによる形而上学の定義と関連づけている⁽⁴⁾。その際デューイは、あらゆる存在は変化していく過程のうちにある、したがって自然的存在も始原から発展し終極に向かう過程のうちにあるというアリストテレスの主張に同意する。しかし、デューイは、この自然的存在の特徴をなすものはその変化の過程の終極において現れる固定的で確実性を有する完成されたもの（すなわち形相）のうちに見出されるというアリストテレスの主張には断固として反対する。中期デューイと同様に、後期デューイも基本的に、あらゆる存在は有機体と環境とが相互作用する状況においてこそ意味をもつと考えるのであって、それゆえ、自然的存在の特徴をなすものもこの相互作用が終極に至ったところにおいてではなく、相互作用が進展していく過程そのものの中に見出されると考えるのである。ここでいう相互作用の終極とは、有機体に余すところなく満足がもたらされる飽和の状態であり、相互作用が進展していく過程とは、有機体とその環境に適応すべく努力を重ねつつある状態である。つまり、デューイは自然的存在の特徴をなすものさえも、有機体と環境との相互作用の過程においてはじめて十全な形で取り出されうると考えるのである⁽⁵⁾。

このように有機体と環境との相互作用の過程に即して自然的存在の特徴をなすものを認識しようとするデューイの自然主義的形而上学は、これをさらにあらゆる存在の一般的特徴の認識へ向けて敷衍しようとするのである。ここで注目すべきは、前期デューイおよび中期デューイが有機体としての人間と自然的社会的文化的環境との相互作用を interaction という用語で言い表していたのに対して、後期デューイは transaction (交流) という用語で言い表すことが多くなるという点である。後期デューイによれば、人間が周囲の社会的文化的環境と交流 (transaction) すると、それによって独特の質を有する状況が醸し出されるのであって⁽⁶⁾、この独特の質を後期デューイは、「浸透的な質 (pervasive quality)」、「直接的な質 (immediate quality)」、あるいは「美的な質 (ethetic quality)」と呼んでいる。この独特の質を有する状況は、通常の単なる物理的社会的状況をはるかに超えた次元を備えており、そこでは様々な要素が1つの質へと統合されて「脈絡をもった全体」が構成されているのである。こうした論点をみれば、有機体と環境との相互作用は、後期デューイにあっては単に生物学的な意味にとどまるものではなく、自然主義的形而上学の発想に基づく独特の交流という次元にまで発展しているということが分かるだろう。

第3に、前期デューイに強い影響を与えた新ヘーゲル主義の魅力を後期デューイが再発見している点に注目したい。これに関して後期デューイは例えば次のように明言している。「ヘーゲルの体系の形式、図式主義は、私には今や極度に人為的に見える。しかし、彼の見解の中にはしばしば尋常ではない深さがある。その機械的な弁証法的道具立てから引き出された彼の多くの分析の中には、尋常ではない鋭さがある。私が何らかの体系の信奉者であるとすれば、他のいかなる体系的哲学者よりもヘーゲルのうちに、より豊富でより多様な洞察があると依然として信じることだろう」⁽⁷⁾。後期デューイにおける自然主義的形而上学の構想には、新ヘーゲル主義が無視しえぬ要因として働いていたことを強く窺わせる言及である。個人と宇宙全体とを融合する論理構造を自然主義的形而上学のうちに入れ込む上で、新ヘーゲル主義はきわめて強力な拠り所を後期デューイに改めて与えることになったとみることができよう。

中期デューイが新ヘーゲル主義を全面的に退けたのとは対照的に、後期デューイのプラグマティズムにおいては部分的にせよ新ヘーゲル主義の観念論的形而上学が再び積極的に取り入れられているのである。こうした経緯は、パースが晩年になってヘーゲル弁証法の奥深さを評価してプラグマティズムを再定義するに至ったことをも思い起こさせるものである⁽⁸⁾。

2 自然主義的形而上学の特徴

後期デューイの思想的特徴をなす自然主義的形而上学が明確な形で登場するのは、1925年の『経験

と自然』においてであるが、それを先取りするような傾向は既に1922年の『人間性と行為』に表れている。この『人間性と行為』は、中期デューイの『倫理学』(1908年)と共通する内容項目も少なくないが、衝動、習慣、精神および知的観念については大幅な加筆が施されて新たに詳細な検討が展開されており、デューイが人間の精神活動のあり方や知性と感情の関係について再考している点で注目に値する。

同書においてまず、デューイは習慣とその様々な型について検討した上で、個人の精神活動における衝動と知性の作用に関する考察を行っている。デューイは習慣との対比においては衝動や知性さえも二次的なものに過ぎず、精神とは、実のところ、生物的資質と社会的環境の相互作用の中で形成される信念、欲望、目的の体系すなわち習慣にほかならないと主張する⁽⁹⁾。ここで注目したいのは、デューイが精神をパース流にただ信念の体系としてのみ捉えるのではなく、ジェイムズ流に信念、欲望、目的の体系として複合的に捉えている点である。デューイはこのような複合的な見地から精神に関する考察を展開して、「欲望と知性は対立しない」ことを強調し⁽¹⁰⁾、温かい情緒と冷たい知性を融合しようと試みている⁽¹¹⁾。デューイにとって、結果に関する知性的な予想は、感情や欲求と合体することで動力を得て、願望や理想の形成に影響を及ぼし、道徳的行為やさらには社会の変革にも繋がっていくのである。こうして知性と感情の二元論的対立は解消され、知性は行為において感情と融合することになる。ここにみられるのは、市村尚久氏が指摘するように、感情(感性)と知性を融合した「知の一元的なあり方」を目指そうとする後期デューイの試みであるということが出来る⁽¹²⁾。後期デューイにおいては、パース流に意味の論理的体系化を図ろうとする傾向が薄れ、代わって知性と感情が融合されたより実践的な道徳哲学の構築を目指そうとする傾向が顕著になるのである。

この後期デューイの思想的傾向をより明確に系統立てて打ち出したのが、『経験と自然』(1925年)であると言える。デューイはこの著作において「自然主義的形而上学(naturalistic metaphysics)」を構築し、自らのプラグマティズムに新しい次元を切り開いている。この自然主義的形而上学は、もとより「伝統的な形而上学」⁽¹³⁾とは別個のものであって、「物理的なものと精神的なものとの区別に関わりなく、あらゆるの種類の実在(existences)によって示される一般的特徴」を認識することを目指すものである⁽¹⁴⁾。デューイによれば、この新たな形而上学は自然主義(または自然的経験主義)に立脚して構築されなければならない。

この後期デューイの自然主義的形而上学の特徴は大別して3つある。第1に、知性と感情の融合を図る点であり、第2に、有機体と環境との相互作用という観点に立脚している点であり、そして第3に、科学と哲学との境界を撤廃しようとする点である。以下これらについて検討してみたい。

まず第1の特徴である、知性と感情との融合を取り上げる。デューイによれば、環境を構成している諸々の事物の客観的差異は感覚を通じて感じ取られるのであるが、そのようにして感じ取られた客観的差異に即して出来事や対象の意味を捉えるのは感情の働きにほかならない。この機能を通じて感情は、有機体に満足をもたらすような選択を行うために将来の予想や将来への準備にも携わることになる。まさに、「感情が意味を担い、意味を創る」⁽¹⁵⁾わけである。このように感情に意味の創造の機能を見出すというのは、後期デューイに特有の主張である。この主張は知性の働きを軽視するものではなく、基本的には知性が感情と融合されることによって可能となる問題解決のあり方を考える趣旨のものなのであるが、感情の働きによって初めて開示される意味世界を切り開こうとする後期デューイの明確な意図を読み取ることが出来るだろう。

次に第2の特徴である、有機体と環境との相互作用という観点についてであるが、まず後期デューイは自然主義の立場から、有機体としての人間と環境との相互作用が単純な経験から高次の経験へと移行する過程に注目し、それを「一次経験(primary experience)」から「二次経験(secondary experience)」への移行過程として論じている⁽¹⁶⁾。ここでデューイのいう一次経験とは、有機体としての人間が日常生活において環境との相互作用を通じて、とりとめもなく感じたり知覚したりするところ

ろに成立する素朴な経験であり、換言すれば、有機体としての人間と環境とのいまだ理論化を経ていないレベルにおける経験である。それに対して、二次経験とは、人間が一次経験について反省し抽象化を施すところに成立する経験であり、換言すれば、抽象的なレベルにおける理論化の成果である。デューイによれば、一次経験と二次経験との区別は、「付随する反省を最小限にして経験されたものと、継続され規制された反省的探究の結果において経験されたものとの区別」⁽¹⁷⁾ に対応している。このように考えると、日常の卑近な生活経験から高度な学問的認識過程に至るまで、すべてを有機体としての人間と環境との相互作用との関連において捉え直すことが可能となり、そこからあらゆる存在の一般的特徴を認識することも可能になるとデューイはいうのである。

以上のような第2の特徴から、第3の特徴である、科学と哲学との境界の撤廃という論点が現れてくる。デューイによると、科学と哲学は、一次経験に対する洗練された反省から生じたものであって、いずれも二次経験の所産であるにもかかわらず、伝統的に両者は別々の道を辿ってきた。デューイは、科学と哲学にこうした大きな隔たりが生じた原因について次のように考える。まず科学について言えば、科学は探究の始点を日常的な一次経験におき、反省と実験を通して二次経験における抽象的な理解を発展させる。こうした二次経験における抽象的な理解は、さらに一次経験にたち戻ってそこで実地に適用され、その正確さや妥当性をテストされることで必要に応じて修正され洗練される。デューイによれば、「自然科学は、一次経験から素材を引き出すだけでなく、テストのためにそれを再び一次経験に戻す」⁽¹⁸⁾ のである。

これに対して、哲学は具体的な一次経験から抽出されて理論化された抽象的な二次経験レベルの理解に安住して、一次経験に差し戻される段階を欠いているとデューイは言う。そのため、哲学はその観念的な世界を一次経験における実験を通じて把握し直す方法をもたなくなり、いたずらに抽象的な傾向を強めるようになるのである。デューイによれば、こうした傾向が顕著な伝統的哲学は、二次経験のレベルにおける抽象的な理解をその源泉である一次経験に差し戻さないために、一次経験と二次経験とを分断させてしまうところに大きな問題がある。そこでデューイは、哲学と科学を探究方法において融合し、伝統的な哲学における一次経験と二次経験の分断を解消しようとするのである。

プラグマティズムの見地からみれば、哲学の探究においても科学の探究の場合と同様に、人間は仮説としての考え (idea) を実際の行動に適用して実験し、その結果から仮説の真理性を判断し、必要に応じてそれまでの世界観を修正してしかるべきである⁽¹⁹⁾。実際の行動において展開される経験の再構成においては哲学と科学を分け隔てるものはないと考える見地から、デューイは、科学的態度、特に実験的態度を哲学に取り入れていくのである⁽²⁰⁾。ここでデューイが哲学に取り入れようとしている科学的態度とは、「あらゆる利用可能な証拠を集める努力をした後に、その証拠にもとづいて探究し検証し識別して結論を出そうとする意志」であり⁽²¹⁾、また、実験的態度とは、「どのような考えもはじめは仮説に過ぎないのであって、「仮説としての考えは実験の結果によって検証される必要がある」とする姿勢である⁽²²⁾。このようにデューイは科学の精神と方法論を取り入れることで哲学を再構築しようとするのである。それはとりもなおさず、科学の精神と方法論を取り入れることで独自の形而上学すなわち自然主義的形而上学を構築しようとする試みにも繋がってくるのである。

さらに後期デューイは、科学と哲学を隔離してきた伝統的な境界線を取り除くだけでなく、科学と道徳、科学と芸術、科学と宗教との境界線をも乗り越えようとする。デューイは、「今日における哲学の第一義的な機能は、科学、道徳、審美的鑑賞の間に想定されている区分のような差異は存在しないことを明確にすることである」⁽²³⁾ と述べているが、こうした後期デューイの見解は、科学と哲学の境界線を取り除こうとするパースの見解を越えて、科学、哲学、芸術、宗教の区別をも撤廃しようとするジェイムズの試みに重なるものである。

3 後期デューイの自然主義的形而上学と教育理論の関連性

後期デューイの代表的著作である『経験と自然』(1925年)では、教育の問題も取り上げられている。そこにおいてデューイは、伝統的な形而上学に基づく教育理論を批判する形で、自らの自然主義的形而上学にふさわしい教育理論を提示している⁽²⁴⁾。

デューイによれば、伝統的な形而上学に基づく教育理論においては、教師は普遍的真理としての知識を所有しており、子どもは教師からその知識を教わって単に記憶するだけであった。教師が所有している知識の対象は、それ自体で存在する客観的実在と考えられており、そうした知識にふさわしい研究方法は、もっぱら定義と分類に訴える合理的証明であって、そこでは知識の対象である客観的実在の変わることのない固定的な本質が扱われるのである。こうした方法を用いて行われる系統的な学問の研究に探究や発見が含まれているとしても、そこでの探究とは、単に既成の知識体系に充当される材料を探し出すことであり、同様にまたそこでの発見とは、特殊な材料が既成の知識体系のどこに組み込まれるかを見出すことにすぎなかった。人間が最高の目的として追求すべき善とは、こうした客観的実在の不変の本質についての知識を絶対的真理として受け入れることであり、そうした知識はそれを所有する程度において客観的実在の不変の本質へと人間の精神を同化し高める効力があると考えられていた。デューイによれば、当時の宗教教育はまさにこうした教育理論にもとづく教育実践の典型であった⁽²⁵⁾。そこでの教師は神の使者として権威をもって公認の教理を子どもに教え込み、子どもはただ教師に服従して教師の与える知識を絶対的真理として受け入れなければならなかったのである。

以上のような伝統的な形而上学に基づく教育理論に対して、後期デューイは、自然主義的形而上学の立場に立って新たな教育理論を構想している。まず後期デューイは、基本的な枠組みを中期の道具主義的教育理論から引き継ぎながら、子どもに既成の知識をただ盲目的に受け入れさせる教育方法を否定し、子どもが自ら疑問を抱き、そこから探究を開始して仮説を形成し、その仮説を実験によって検証する学習を重視する⁽²⁶⁾。つまり、既成の知識といえども仮説の候補に過ぎないのであり、それに疑問を表明することを許容するだけでなく、それが仮説として不適切であると判断される場合には、それを改良するために探究を行い、新たな仮説を考えてそれを実験に付することを推奨するのである。こうした問題解決学習は、既成の知識の確実さを単に確認するための作業ではなく、仮説の有効性を検証するための作業であり、これによって子どもは自ら推論し主体的に判断して問題を解決する能力を身につけることができる。

後期デューイは、以上のような中期の道具主義に根ざした知的探究を尊重すると同時に、芸術的経験(美的経験)や宗教的経験(神秘的経験)の意義をも積極的に評価するようになる。デューイは、人間もまた自然の中に生存するがゆえに自然的有機体の1つであることを認めた上で、人間と自然環境との相互作用のうち最も完成度の高いものは、芸術的経験のうちに見出されると考える。なぜなら、芸術的経験においてこそ、知性は感情を洗練して秩序ある自由な感覚をもたらし、感情と対立するのではなく感情と協働的に機能するようになって、偶然的なものと法則的なもの、道具的なものと究極的なもの、個的なものと普遍的なものとが自然の中で交錯していることを感得できるようになるからである⁽²⁷⁾。こうして後期デューイは美術(fine art)を活用した教育の重要性を芸術的経験との関連において強調するようになるのである⁽²⁸⁾。

以上のように『経験と自然』で提示された後期デューイの教育理論は、自然主義的形而上学に基づいて、人間と環境との相互作用を問題解決のための知的探究の側面からだけでなく、さらに芸術の側面からも捉えることによって、知性だけでなく感情の働きをも重視している点で、確かに深みを増しているが、教育論としての展開はまだ十分とは言えない。教育論としての更なる展開を提示しているのは、後期デューイの教育学上の代表的な著作である『経験と教育』(1938年)である。同書は、伝統的な教育理論と進歩主義教育の教育理論の両方を批判的に考察しながら、自然主義的形而上学に

もとづいて教育に関する様々な論点を提示している点で注目に値する。

この『経験と教育』においても、まずデューイは経験の二原理、すなわち連続性の原理と相互作用の原理を取り上げることから始める。連続性の原理は、教育の目的である成長それ自体と関連づけられ、相互作用の原理は、子どもが自然的社会的環境から作用を受けつつそれに能動的に働きかけることによって成立する経験のあり方と関連づけられている⁽²⁹⁾。その上で、デューイは、子どもが自然的社会的環境と相互作用するプロセスにおいて願望や目的に関わる態度がいかに関形成されるかという点に注目している⁽³⁰⁾。教育の働きは、不確定な問題状況を質的に統一された状況へと変容する過程で子どもの知性や感情を豊かに発達させ、過去の経験から蓄積してきたものを将来に向けた探究において役立てる経験を助長することにあり⁽³¹⁾、そこでの教育者の重要な役割は、子どもの経験がどのような方向に向かっているのか、子どものどのような態度が連続的な成長をもたらすことになるのか、いかなる環境が子どもの成長を導く経験を促進するのかということを具体的に認識して指導に従事することである⁽³²⁾。したがって、教育者は子どもにとって価値ある経験を構成するために自然的社会的環境をいかに活用するかを熟知しておかなければならない。

上でも触れたように、自然主義的形而上学を導入した後期デューイの教育理論においては、知性と並んで感情や欲求の意義が強調されている。後期デューイによれば、「知的な予想や結果の観念が力を獲得するためには、欲求や衝動と混ぜ合わされる必要がある。……欲求は観念に原動力と推進力を与える。こうして観念は実行されるべき活動における計画、または活動のための計画になるのである」⁽³³⁾。中期デューイの道具主義的な教育理論では、問題解決学習において子どもの知性を発達させることに関心を集中する傾向が目立っていたのに対して、後期デューイの教育理論においては、知性が感情と融合して働くことが強調されているのである⁽³⁴⁾。こうして後期デューイの教育理論は、芸術教育や情操教育の可能性を積極的に展開していくことになるのであるが、これについては別稿に譲る。

結論

以上のように後期デューイの自然主義的形而上学は、知性と感情を融合し、有機体と環境との相互作用の観点を日常生活の領域から高度に発達した学問の領域にまで押し広げ、科学と他の学問や芸術との境界を曖昧にする点で前期デューイの思想的立場に近づいているとも言える。それは後期デューイがジェームズのプラグマティズムや新ヘーゲル主義を改めて高く評価していることを考えれば当然と言えるであろう。しかし、後期デューイは、単に前期の思想的立場に戻ったわけではなく、パースとジェームズにおけるプラグマティズムの可能性とその限界をそれぞれ十分に把握し、また新ヘーゲル主義の観念論的な側面を除去した上で、より深化し洗練されたプラグマティズムを独自の自然主義的形而上学において再構築したことを見逃してはならない。

また、この自然主義的形而上学に基づいて再構築された後期デューイの教育理論は、科学的方法を重視する道具主義的な側面を保ちながらも、個と全体の融合、知性と感情の融合を強調する形而上学の側面を際立たせている。つまり、後期デューイは、プラグマティズムにもとづく教育理論に自然主義的形而上学を組み入れることにより、子どもの知性と情緒、そして個性と社会性を包括的に成長させるための教育理論を構築していったのである。このような後期デューイの教育理論は、前期の新ヘーゲル主義的な観念論と中期の道具主義とを総合した構造を呈しており、デューイのプラグマティズムの教育理論における最終的な発展形態として位置づけることができるであろう。

(註)

- (1) L.S.Feuer,"Introduction," LW 15, p.XXII. Cf. John Dewey,"William James and the World Today," 1942, LW 15, pp.3-8. John Dewey,"William James as Empiricist,"1942, LW 15, pp.9-17.
- (2) John Dewey,"From Absolutism to Experimentalism,"1930, LW 5, p.157.

- (3) Jane M. Dewey(ed.), "Biography of John Dewey," P.A. Schilpp(ed.) *The Philosophy of John Dewey*, Open Court, 1939, p.36. George Dykhuizen, *The Life and Mind of John Dewey*, Southern Illinois University Press, 1973, p.209. (三浦典郎／石田理訳『ジョン・デューイの生涯と思想』, 清水弘文堂, 1977年, 307頁)
- (4) John Dewey, *Experience and Nature*, 1925, LW 1, p.308.(河村望訳『経験と自然』, 人間の科学社, 1997年, 407頁)
- (5) Ibid., p.201. (邦訳, 268頁)
- (6) Ibid., p.91.
- (7) John Dewey, "From Absolutism to Experimentalism," 1930, LW 5, p.154.
- (8) Charles S. Peirce, "Evolutionary Love," CP 6:307. (上山春平・山下正男・魚津郁夫訳『パース／ジェイムズ／デューイ』, 中央公論社, 1980年, 206頁)
- (9) John Dewey, *Human Nature and Conduct*, MW 14, 1922, p.3.(河村望訳『人間性と行為』, 人間の科学社, 1995年, 9頁)
- (10) Ibid., p.177. (邦訳, 248頁)
- (11) Ibid. (邦訳, 249頁)
- (12) 市村尚久「教育実践理論への「超越論」的視座」, 『教育哲学研究』第84号, 2001年, 107頁。1933年に改訂された『思考の方法』でも、デューイはもはや反省的思考に関する形式的段階説を強調することはなくなり、反省的思考の多様な機能を重視すると共に、その活用を規定するのも一般的な規則ではなく個人の感受性などであると見ている。J. Dewey, *How We Think*, the Second Edition, 1933, LW.8, p.207. また、経験に関しても、道具主義的な問題解決の能動的側面だけでなく、「観念との戯れ」から「審美的満足」がもたらされる受動的側面も強調するようになる。Ibid., p.262. 以上については、藤井千春「反省的思考の五つの側面あるいは局面について」(『日本デューイ学会』第40号, 1996年)を参照した。
- (13) ここでいう「伝統的な形而上学」とは、感覚や知覚で把握できる世界を超越した存在を探究する学問一般を指す。
- (14) John Dewey, *Experience and Nature*, p.308. (邦訳, 407頁) デューイはこの自然主義的形而上学を「経験的自然主義」、「自然的経験主義」、「自然的人文主義」と呼ぶこともある。Ibid., p.10.
- (15) Ibid., p.198. (邦訳, 264頁)
- (16) Ibid., p.15. (邦訳, 23頁)
- (17) Ibid. ここでデューイがいう一次経験は、ジェイムズのいう純粹経験あるいは直接経験に対応し、二次経験はジェイムズのいう間接経験に対応すると捉えることもできるであろう。
- (18) Ibid.
- (19) John Dewey, *The Quest for Certainty*, 1929, LW 4, p.111.
- (20) John Dewey, "The Sources of a Science of Education," 1929, LW 5, p.4.
- (21) John Dewey, "Unity of Science as a Social Problem," 1938, LW 13, p.273.
- (22) Ibid.
- (23) John Dewey, *Experience and Nature*, p.304.(邦訳, 402頁)
- (24) Ibid., p.122.(邦訳, 164頁)
- (25) Ibid., pp.122-123. (邦訳, 165頁)
- (26) Ibid., p.123. (邦訳, 166頁) 知識の真理性をもたらすものは、知識に先行して存在している客観的実在の不変の本質などではなく、仮説を実験することによって得られる結果なのである。過去から継承された既成の知識は、あくまで仮説であることを免れないのであって、普遍的な絶対的真理ではないのである。実験を通じた探究の結果として見出された新しい知識は、古い信念を修正し、知識の対象の意味をも変えてしまう。
- (27) Ibid., p.293. (邦訳, 388頁) Ibid., p.325. (邦訳, 430頁)

(28) Ibid.

(29) Ibid., John Dewey, *Experience and Education*, LW 13, p.24. (河村望訳『学校と社会・経験と教育』, 人間の科学社, 2000年, 168頁)

(30) Ibid.

(31) Ibid., p.26. (邦訳, 171頁)

(32) Ibid., p.22. (邦訳, 166頁)

(33) Ibid., p.45. (邦訳, 193頁)

(34) 知性ととも感情的要因を重視する後期デューイの思想傾向は、特に『価値づけの理論』(1939年)に顕著な形で表れている。同書においてデューイは知性と欲求とを区別した上で両者を融合するのではなく、適正な欲求を直接的に知性として捉えることによって、はじめから欲求と知性を一体的一元的に把握している。この点に着目し、斎藤勉氏は、「デューイは『価値づけの理論』以後の著作や論文において、欲求と知性の二元論から一元論へと立場を深化させた」と指摘している(斎藤勉『デューイの教育的価値論』, 福村出版, 1980年, 114頁)。ただし、本稿で指摘してきたように、欲求や感情を知性と融合するデューイの思想傾向は、『価値づけの理論』以前にもすでに、『人間性と行為』(1922年)や『経験と自然』(1925年)をはじめ、『誰でもの信仰』や『経験としての芸術』などにも見出されることは留意しておく必要があるだろう。